

7. 今年度の実践から「科学する心」について分かったこと 大幸幼稚園（愛知県名古屋市）

昨年度は、幼児の「気づき」に着目したが、今年度は、保育のキーワードを「心を動かす体験」とした。自然とのかかわりの中で、「面白そう」「楽しそう」という「心の動き」や「そのプロセス」を大切にしていくと、納得いくまでやってみようとし、感じたこと・考えたことがその子のものになっていくと思われる。

① 幼児が自分の課題を見つけたときに「科学する心が育まれる」

子どもたちはダンゴ虫を集めていたとき、単に楽しんでいただけではなく、たくさん集めた中から違いを見つけ、虫を種類別により分ける課題に取り組んでいた。その課題（違いを見つけるなど）が楽しいからもっと見ようと、自覚したり抱え込んだりして「学んで」いた。「遊び」の中に課題を見つけ、「学び」となっていく過程で「科学する心」は育くまれると確認しあった。



② それぞれの課題が取り込まれて「科学する心」が育まれる

ア 幼児は未知のことが多いからこそ自分に置き換えて考える。
イ 次第に「これでいいのかな」と心をゆらし、調節していく。
ウ 自分中心に考えたり、思いをめぐらしたり、周りの様子から感じとったりして、自分の世界を広げていた。

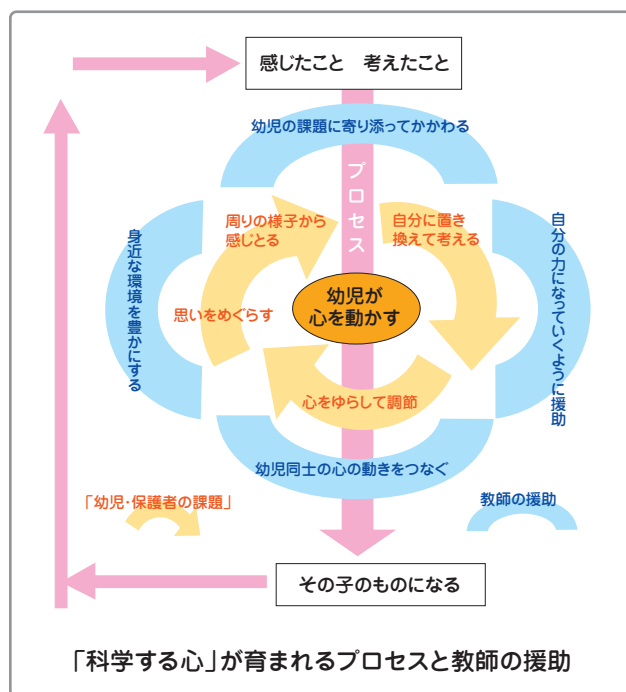
③ 「科学する心」を育むための教師の援助

幼児が「色水で遊んでいる」から「虫捕り」を繰り返しているからと、表面的な活動や体験で「科学する心」が育まれると考えては幼児の育ちにつながらない。幼児の心を読み取り、援助し、環境を構成する教師のかかわりがあって、「科学する心」が育まれていた。

ア 幼児の心の動きを読み取り、幼児の課題に寄り添ってかわる。
イ 経験したことが身についていったり自分の力になっていったりするように援助する。
ウ 意図的に身近な環境を豊かにしていくことが可能性を高めるとい意味で大切である。
エ 幼児同士の心の動きをつなげる援助が、次の発見と意欲を生む。

④ 分かったことを実践に生かす

ア 幼児が心を動かしていると感じたとき、課題は何か？「自分に置き換えているか」「心をゆらしているか」「思いをめぐらしているか」「周りから感じとっているか」などの様子を見守ってから、かかわっていくようにする。
イ 教師がかかわるときには、幼児の課題を分かって「寄り添い」、「教えようではなく、教師自身も心をゆらしながら幼児の心の揺れに共感して、幼児自身が解決の方向を見つけることができるようにする」、「友達とともに考えたり感じたりなどのコミュニティの場がもてるようにする」、「環境を構成したり、再構成したりして、幼児の心が動く場となるように工夫する」
ウ 幼児理解ができるように日ごろから幼児が何を楽しんでいるのか、幼児の発達に必要な経験は何かと見極めることができる感性を磨くようにする。「遊び」＝「学び」などと安易な見方をしないように心がけたい。



ポイント

「心を動かす」プロセスの中で、「科学する心」が育まれることを昨年度の実践の中から見出し、今年度はそれを受けて「心を動かす体験」を中心に実践が積み重ねられました。その実践の後に、しっかりと考察がなされ、子どもの「科学する心」の捉え直しがされています。また、その時必要な保育者の援助の在り方にも結びつけ、来年度の実践の保育者の姿勢まで考えられています。